研究実践1

読書と読解の関連を図るための直観的に作品を読む学習指導

江戸川区立下鎌田西小学校　指導教諭　前田修郎

1，現在の課題から

【画面2】

読書の好き嫌いの二極化が進んでいると言われます。私が担任している3年生のクラスでは、4月からすでに数千ページ読んだ児童が十数名いる一方、自由読書の時間になると決まって図鑑や絵本をながめているだけの児童も数名います。長い文章を読まない児童に理由を尋ねてみると、「読むのが面倒くさい。」と答えます。そのような児童にも、長い文章を一気に読み終える読書体験をたくさん味わわせ、読むことの楽しさを実感してほしいと願っています。

2，学習指導要領から

学習指導要領3、4年　C「読むこと」の言語活動例に、ア「物語や詩を読み、感想を述べ合うこと」とあります。これは、一冊の本だけを読んで完結するのではなく、同じ主人公や作家、シリーズものへと読み広げることで、読書の楽しさ、必要性、読み終わった後の満足感、充実感などを味わわせ、読書への関心意欲を高めていこうというものです。現在の「読むこと」の指導の課題として教科調査官の水戸部修治氏は「教育科学国語教育」誌10月号の中で次のように述べています。

【画面3】

「『読むこと』の指導の課題としては、子どもたちが主体的に思考・判断できる余地の少ない指導過程が多いことが挙げられる。」

また、そのための解決策の一つとして、同じ稿で「作品全体から好きなところを見付けて読んだり、そのわけを考えて繰り返し読んだりする活動を取り入れる。」と述べています。

これまで「読解」と「読書」の関連では、一つの教材の読解学習が終わった後その発展として読書する実践や、読解と同時に読書する並行読書が盛んに行われてきました。

本研究会の主宰中沢政雄氏は、かつて「国語情報」誌の中で

【画面4】

「文学の読書の楽しみが味わえるのは、比較的楽な直観的な読みによって、直接作中の人物に触れたり、作品のおもしろさがわかったり作品の主題がわかったりする喜びにひたることができるからである。直観読みの楽しさが味わえるからこそ、さらに読書しようとする意欲が湧き起こるのである。（中略）　子どもたちの読書をすすめるためには、直観的に作品の内容や主題を理解する力、つまり、直観読みを通して、直観的思考力を伸ばしてやることが重要なのである。（中略）直観読みによる読書学習の楽しさを味わ

った後にこそ、読書意欲は喚起され、主体的な読書活動が行われるのである。現在のように、文学作品の読解学習をしてから、読書をすすめるやり方は逆なのである。」と主張してきました。

そこで本単元では、この後の教材『手ぶくろを買いに』の前に、新美南吉の物語を読んで、直観読みによる読書学習の楽しさを味わわせ、読書意欲を喚起し、主体的な学習活動につなげようと考えました。【画面5】

単元は「読書の楽しみ」として、読書学習の指導、教材は、新美南吉の作品の中から、文字抵抗、語彙抵抗の少ない童話で、直観的な読みの可能な教材として「赤いろうそく」を使用することにしました。【画面6】

また、3、4年の「読むこと」の指導事項に、ウ「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと」とあります。本教材の特長として、○場面の移り変わりがとらえやすい　○登場人物の気持ちが分かりやすい　○叙述を基に情景を想像しやすいが挙げられます。そこで、児童の興味関心や発達段階、能力差を考慮して、一番心に残ったところにサイドラインを引き、その理由を伝え合うという活動を通して、「読むこと」に関わる指導事項を身に付けさせたいと考えました。

3，本時について

本時についてです。

学習目標は、「童話『赤いろうそく』を直観的に読んで、赤いろうそくを花火だと思いこんでしまった動物たちの花火に対する期待と恐れの中で起こるユーモラスな出来事のおもしろさを感じながら読書を楽しみ、さらに進んで本を読もうと意欲をもつことができる」としました。

学習評価は、観点は、直観的におもしろいことが読み取れたか、基準の①として、文章中の言葉を根拠にしておもしろいところが読み取れたか、②として感じ方の違いを知って感想が広がったり深まったりしたかとしました。そして、方法は◎○△の自己評価としました。

【画面7】

本実践では、授業改善の視点として、

○直観読みを重視して読書意欲を喚起すること
○学習課題を子供とともに作って主体的な学習活動を促すこと
○学習課題に対して適切に自己評価させ、指導と評価の一体化をはかること

としました。以上です。本実践について、どうぞ忌憚のないご意見をよろしくお願いいたします。

「やまなし」の授業を終えて
～作品の世界を豊かに味わおう～

杉並区立浜田山小学校　教諭　山口達郎

1．授業全体

単元の目標を「『やまなし』の豊かな表現に即して作品の世界に読み浸り、作者が伝えようとしていることについて考えることができるとともに、宮沢賢治の他の作品を読み比べて、今後の読書生活に生かすことができる。」と設定しました。児童が叙述に即してイメージを広げ、作品のもつ世界を味わうようにしたいと考えたからです。作者である宮沢賢治の名前はほとんどの児童が知っていましたが、実際に作品を読んだことがあるという児童はクラスの２割程度でした。そこで、事前に『注文の多い料理店』の読み聞かせをし、宮沢賢治の作品に触れさせました。じっくりと興味深そうに読み聞かせを聞いていました。

2．単元の学習指導課程（全７時間）

直観読み（第１時）

全文を直感的に読み、感じたことを書かせました。５月と１２月それぞれのイメージを言葉、または絵で表させました。児童からは、かにの親子が仲が良い、いいこともあれば悪いこともある、人間と同じというような感想が出ました。

分析読み（第２時～第５時）

５月、１２月ともに２時間ずつ扱いました。

５月の１時間目は

①学習単位を読み、学習課題を立てさせる。「『５月』の川底の様子はどんなか」

②情景を表す言葉にサイドラインを引き、全体でどこに線を引いたか、どんな様子なのかを確認させる。　※ひかりのあみ

③サイドラインをもとに情景を想像し、絵で表させる。

絵で表したものを発表させ合う。

④評価基準を設定し、自己調節、自己評価させる。

という流れで進めました。登場人物同士の位置関係、大きさを考えることで、児童はより生き生きと川底の様子を想像できました。

５月の２時間目は

①学習単位を読み、課題を立てさせる。「『５月』のかにの兄弟の心情の変化をとらえよう。」

②叙述をもとに、かにの兄弟の心情の変化を考えて学習シートにまとめる。

③「かわせみ」に象徴される意味についての自分の考えをまとめる。

④まとめたものを発表し合う

⑤学習を振り返り、「５月」のイメージを言葉でまとめ全体で交流。

⑥評価基準を設定し、自己調節、自己評価させる。

という流れで進めました。

１２月も、５月と同じ流れで進めたので、童が見通しをもって進んで取り組めました。また、児童が書いたものをプリントにまとめて配りました。

体制読み（第６時）

まず、「やまなし」がどんなお話だったのかを振り返り、学習課題を設定しました。「作者が伝えたかったのは何か考えよう。」

次に学習の方法を児童と確認しました。①本文を読み直す。②既習事項の確認（学習シートを読み直す）

学習シートはABCの３種類用意しました。

A：ヒント無し　B:ヒントとなるリード文あり

C：５月、１２月がどんなお話だったのかがあらかじめ書いてある。

課題の分析がされずに進んでいったため、Cの学習シートを選ぶ児童がほとんどでした。

１０分程度自己学習をし、共同学習させました。

児童は自分の言葉で作者が伝えたかったことについて書いていましたが、課題があいまいだったため、「それについて自分がどう思うのか」と主体的な感想をもつには至りませんでした。

そのため、評価基準も「筆者が伝えたかったことについて書けていれば良い」という曖昧な基準となってしまいました。

（第７時）

「イーハトーブ～」を読んで宮沢賢治の人柄や生き方に触れました。また、図書や朝学習の時間を使い、関連本を読む時間を確保しました。

３．授業改善の視点

作品の世界を素直に味わう読みへ

私は、作者の最も伝えたかったことを『自然界における生と死、または死してなお恵みを与える存在』と捉えていました。ゆえに、授業の中でも、そのように押さえすぎてしまいました。児童の発言や記述を分析すると「めぐみや幸せを与えられる世界を表現している」「自然界の平和や悲しみ」と捉える児童が４名、「かにの兄弟の成長」「悪いこと（試練）の後には良いことがある」「何が起きるか分からない」「幸せは待て」などと書いた児童が１３名、無回答が２名いました。この結果から、やはり児童が作品の世界に読み浸り素直に感じたことを表現させることが、児童の思考の流れとしてもふさわしいということが分かりました。学習課題は「作品を通して作者が伝えようとしていることについて、自分はどう考えるか。」とすると児童が何を書けば良いのかがはっきりすると考えました。「どんなお話だったのか」ではなく、「児童が読み味わったことを表現する」ための授業をしていかなくてはなりません。

発表から交流へ

児童が自分の読みを書き表し、それを交流でいかに広げ深められるようにするのか。本時の交流は「発表会」で終わっていました。学習指導要領解説編に「書いたものを発表しあう場合、記述した内容そのものに加えて、書こうとした意図、すなわち、誰に向かってどのような目的で伝えようとして書いたのか、またそのためどのような表現を用いたのかなどを述べることも必要である。」とあります。自分のどの叙述から考えたのか、自分の考えの根拠を明確にして交流することで国語にふさわしい確かな学習の場になると考えました。

ワークシートから学習シートへ

本時で使った学習シートがワークシート化していました。学習シートは児童が自己学習できるためのシートと考えます。課題の枠に「課題」と明記したり、学習方法も丁寧に明記する必要がありました。

また、シートをABCに分けると学力差が意識されやすいので、例えばダイヤ、スペード、ハートといった記号を用いる必要がありました。

4．最後に

中沢先生は『やまなし』を読む態度として、「まず、教材を読む態度としては、先入観を持たないで、素直に読むことが第一です。たとえば、この教材を読むとき、わたしは、宮沢賢治はこういう人だ。こんな考えをもった人だ。その作品にはこんな特色があるなどというようなことは、一切考えずに、素直な気持で読みました。

そうして、教材の大体を押さえてから、今度はていねいに読んでいきます。すると、ストーリーも、プロットも、表現もすべて教材が、こうだよと教えてくれます。ですから、何もかも教材に教わるという態度で読みます。」(『国語情報』第27巻 第5号 通巻312号 1996.5 P1より引用) と書かれています。

今後はこの反省を生かして、さらに自己研鑽に励み、よりよい授業改善を目指していきます。

研究実践３

意図と根拠を明確にして話すためのシミュレーション学習

清瀬市立清瀬第十小学校　主任教諭絲川佐知子

①　清瀬市立清瀬第十小学校で主任教諭をしている絲川佐知子です。

五年生の一月に実践したシミュレーションによる基本的技能の学習指導「意図と根拠を明らかにして話す」について報告いたします。

教材は私の自作教材

「清瀬の人参」と「あいさつ」です。

②シミュレーション学習についてお話します。

一番分かりやすい言葉でいえば「ごっこ」です。模擬学習といってよいです。

言語や技能が身に付く過程をシミュレーションするのです。一時間の学習の中で技能が身に付く過程を体験していくわけです。

③高学年に求められる話す聞くの能力の重点の一つが意図　いいたいことを明確にし、根拠子どもたちに分かりやすい言葉でいえば理由を話し、聞き手に正しく伝える能力を身に付けることが重要です。技能を身に付けさせるための指導を考えて一時間の授業を構成していきます。

④教材作りについてお話します。

第一の教材「清瀬の人参」は、意図と根拠について理解しその大切さに気付き、その能力を理解し、身に付ける過程をたどって作成します。

第二の教材「あいさつ」は、獲得した技能を活用し自分も話したいという意欲をが高まるように作成しました。

人参栽培は清瀬市にとって重要な産業です。実際に作っている方にインタビューにいったり、商工会議所をたずねて教えて頂き、インターネットなどで調査をして作成しました。

どちらの教材も子どもたちのふだんの言語生活をふまえて、目の前の子どもたちの意欲関

心、能力に合わせ作成する努力をしました。

⑤授業の実際についてお話します。

第一の教材の「清瀬の人参」は校長先生の全校朝会でのお話という設定で学習しました。音声言語の指導は音声を活用することが効果的です。担任の先生に読んでいただきました。意図と根拠が伝わるように読んでほしいという打ち合わせ通りに読んで下さいました。実際の音声をお聞きください。（録音を流す。）子どもたちは目を輝かして聞きました。「農家を大事にしよう。」とい意図にほとんどの児童は気づきました。努力をいくつか言ったみたいだと発言が続きました。そこで、意図と理由に気をつけながら聞く事を課題にして再度お話を聞きました。二度目を聞いた後は清瀬の人参について農家の人が努力していること3つ「品種の研究」「特産品にする努力」「土づくり」を聞きとりました。「根拠をしっかり言うと言いたいことがすごく分かるし、感動した。心から分かったと感じた。」と子どもたちが話していました。真剣に学習に取り組んでいることが良く分かりました。

⑥根拠を明らかにして話すと、聞き手に良く伝わるという理解が出来たところで、次はその獲得した技能を活用して自分自身が話す学習をします。ここで生活指導主任をしている担任の先生に朝会などでお話しするときの心をインタビューしました。「私は、ただ挨拶が大事といっても伝わらないので、いつも自分の体験をそえて話しています。」と答えて頂きました。そして体験を交えてお話をしていただきました。（お話を流す）子どもたちは意図を捉え自分たちも話したいという意欲をもって　体験や出来事を根拠にアウトラインを学習シートにメモしました。ペアで学習に取り

組み、メモをもとにお互いの話を聞き合いました。そのあと、五人の子どもに代表として発表をしてもらいました。一番にはなしてくれた児童は「あまり私と話すことがなかった子に、元気にあいさつしたらにっこりと笑ってくれて、その日からずっと前からの友達のように仲良くしてくれた。すごくうれしかった。元気にあいさつすることは大事なことです。」と自信をもって話してくれました。自分たちの伝えたいことを明確にするためにふさわしい話を選び発表をし実に適切な内容でした。

学習のあと全員が振り返りを書きました。（振り返り綴りを紹介する、）

⑦振り返りからも、子どもたちが今回の学習の目標に達していることが分かります。①意図と根拠を言えば分かりやすい話が出来る。②意図と根拠を聞くと分かりやすい。③書いたら根拠にできそうな体験を思い出した。この一時間に大きく変容していることが感じられました。最初に発表した児童は、振り返りで

「誰でも考える理由や根拠があるのだと知りました。自分が一番伝えたいことを分かりやすく理由をつけて話したいです。自分の意図を確かに伝えるたねにとても大事だと思います。」

⑧授業で話し合う子どもたちの表情が学習を進めて行く中でどんどん真剣になり、明るくなり技能を習得することの喜びが学習の原動力であることを深く感じました。

⑨シミュレーション学習は能力の実態をつかみ学習目標を立て、技能の活用までの過程を計画的にシュミレーションします。充実した言語活動が出来、一時間の学習で大きな効果を上げることが出来ます。

⑩これからも言葉を大切にする指導を行ってまいりたいと強く思っております。

最後に

この実践をするにあたり、多くの方の協力をいただきました。一緒に授業をしていただいた手塚先生、清瀬第十小学校の皆様、地域の皆様、子どもたち、の協力のおかげでこの実践が出来ました。心のこもった言葉の力が人を「生かし」、人間関係を「深め」、心と能力を「高める」のだと実感しました。多くの感謝とともにこの発表を終わらせていただきます。聞いていただきありがとうございました。

終了